



考 証 伊 勢 物 語 詳 解

限定版 300部ノ内

第 30 号

|   |   |
|---|---|
| 不 | 復 |
| 許 | 製 |

(奥付)

1966年 2 月15日 印刷

1966年 2 月25日 発行

定価 5,000円

著 作 者 鎌 田 正 憲

印 刷 所 セイユウ写真印刷KK

製 本 所 有限会社 今泉誠文社

発 行 所

名 著 刊 行 会

東京都中野区松ガ丘 1 ～ 22 ～ 7

落丁、乱丁の際はお取替いたします。

## 緒言

平安朝は國文學全盛の時代なり。この時代に於て最もてはやされたる者は、伊勢物語と源氏物語と古今集となり。鎌倉時代以後の國文學は主としてこの三書の研究にして、註釋批評の書の多き、汗牛充棟も啻ならずといふべし。

定家卿詠歌大概「殊<sup>ニ</sup>可見習者古今伊勢物語後撰云々」とあるが如く古來伊勢物語は、古今後撰と並びて、歌學の須要たりといへども、本體なほ物語にして、伊勢物語の簡潔適健なるは、源氏物語の典雅優麗なる、共に平安朝の文學を代表し、源氏物語の趣向は伊勢物語に胚胎せりといふべし。

伊勢物語は描寫、純樸にして虚飾を交へず、真情流露して人の肺腑を突くものあり。東下りの條、

武藏國と下總國との中にいと大きな河あり。それを隅田河<sup>すんだがは</sup>といふ。その河のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守<sup>わたしもり</sup>はや舟に乘れ、日も暮れぬといふに、乘りて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴<sup>はし</sup>と足<sup>あし</sup>と赤き、鳴<sup>しや</sup>の大きな、水の上にあそびつゝ、魚<sup>いさ</sup>をくふ。京には見えぬ鳥なれば、

抑伊勢物語、根源古人之説々不同。或云在原中將自記云々因茲有謙退比興之詞等。又云伊勢筆作也。或云生年十三幼書之似彼家集文體、是故號伊勢物語。以此兩說案之、更難決之。心中祕密身上與言

他人推而難注之、以之可謂其自書歟。但疑萬葉古風中多載撰集之歌。仁和聖日之間粗記

臨幸之儀。此等事又不審。伊勢家集其端、文體偏以同之。是又見先達舊記、庶幾其體歟。兩不

知之。加之此物語、名字非彼筆者何稱伊勢乎。或説云爲狩使下向伊勢、仍有此名。其説

又難信。始則載南京春日之詞、次又注西對夜月之思。富士山之雪武藏野之煙、凡非伊勢國事、

多以爲此物語之肝要。仍兩説共有不審。古事只仰而可信。

又或説後人以狩使事改爲此草子端、爲伊勢物語之道理也。件本狼藉奇恠者也。伊行所爲

也。不用之。

元年所書之本爲人被借失、仍爲備證本、重所校合也。

戸部尙書在判

とあり。この本三條西家に寫ありて逍遙院、稱名院、三光院、代々此奥書の趣を以て講釋せりといふ。解題參照。一は天福本といひて、奥書

天福二年正月二十日、己未、申刻、凌桑門之盲目、連日風雪之中、遂此書寫、爲授鐘愛之孫女也。

同二十二日校了。

とあり。此本六半の小本にして作者並異説の沙汰なし。

此本、後に禁裡御本となりしが逍遙院後土御門院より拜領あり。連歌師

宗長の執次にて今川治部大輔氏親に遣はされ、氏親、義元、氏真と傳はりしを、氏真、武田信玄に亡さるゝに及び、信玄の手にうつりしが甲州戰亂の時紛失したりと云む。されど逍遙院より今川家へつかはされし時逍遙院一字不違書寫しおける本三條西家にあり、細川幽齋これを寫して所持したりといふ。解題參照。三は武田本といひて、奥書

合多本二所用拾一也可備證本。

近代以狩使事爲端之本出來、末代之人今案也。不可用之。

此物語古人之說不同或稱在中將之自書或稱伊勢之筆作就彼是有書落事等。上古之人強不可尋其作者、只可翫詞華言葉而已。

戶部尙書 在判

とあり。

此本は後土御門院の勅物也。然るを後奈良院の時能州畠山修理大夫入道徳胤、稱名院並萬里小路前内府執次にて申賜はる。其後一亂の時紛失、越前朝倉入道宗順求め出して、若州武田伊豆入道紹眞是を傳ふ。其後三好修理大夫長慶是を傳へたりしを、長慶滅亡の後、天正十六年仲秋細川幽齋泉州堺より求め出して所藏せりといふ。此本一度武田入道紹眞所藏せしより武田本とはいふ。解題參照。

本系統に屬する證本にして參訂したる者次の如し。

一古寫本 爲相卿本書寫飛鳥井雅世卿筆 (流布本)

一卷 宮内省藏

一古寫本 爲相卿本書寫 (流布本)

一卷 同

一古寫本 (流布本)

一卷 内閣文庫藏

一古寫本 (流布本)

一卷 著者藏

一古寫本 冷泉爲和卿筆 (天福本)

一卷 宮内省藏

一板本 西三條實隆書寫奥書 (天福本)

二卷 著者藏

一寫本 (天福本影)

一卷 東京帝國大學藏

凡例

三

## 凡 例

### 一 本 文

伊勢物語は狩使本

業平朝臣原撰

初冠本

天曆以後粉飾

共にはやく繪卷物として傳はりければ、卷物の

斷篇となるに及びて段々の順序亂れたるのみならず、六條家以下歌人の傍註本

文に攪入せるがありて、平安朝の末葉既に幾多の異本を生じたり。

諸抄に七流の本とて、一には業平自筆本、二には

具平親王本、三には安倍師安本、四には賀茂内侍本、五には高階二位尼本、六には伊勢中書本、七には長能狩使本とあるは一々確證に備へ難しと雖又以て平安朝時代に於ける諸本不同の情勢を察すべし。されば鎌倉時代以後、

この物語の流布益々盛なると共に轉々書寫の誤を重ねたり。蓋しこの歌人の攪入

轉寫の誤謬を訂さむ事は一に系統明かなる證本に校ふる外はあらじ。これ本書校

勘證定の第一義にして、定家本、塗籠本、眞名本を始めて、つとめて典據ある證

本を參訂したる所以なり。

一 參訂證本及參考古寫本繪詞斷篇

い 定家本 (證本の二)

定家本に三流あり。一は流布本と云ひて、奥書

皆人見知らず、渡守わたしもりに問へば、これなむ都鳥みやどりといふを聞きて、  
名にしおはいざ言問こととはん都鳥みやどりわが思ふ人はありやなしやと。

### といひ、惟喬親王の條、

思ひの外に御髪みかみおろさせ給ひて小野といふ所に住み給ひけり。正月ひつぎに拜み奉らむとて詣まうでたるに、  
比叡ひての山の麓ふもとなれば雪いと高し。強ひて御室みむろに詣まうで拜み奉るに、つれなくといと物悲しくておはし  
まなければ、やゝ久しくさぶらひて、古の事など思ひ出いでて聞えけり。さてもさぶらひてしがなと思  
へど公事こうじどもありければ、えさぶらはで、夕暮ゆふぐれにかへるとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは。

といへるが如き、千載の下なほ人を泣かしむべし。

この物語は、もと繪卷物にて傳はりしかば、その斷篇となるに及びては、段々の序  
次亂れ、歌人文士の傍註、いつしか本文に紛れ、攪入混亂少からざるものあり。乃ち  
こゝに先賢校定の後を享けて、力を本文の考證にすゝめ、内閣、宮内省、帝國大學等  
の書庫を探り、諸家珍藏の繪卷物斷簡を參考して攪入を分てり。

今や、文運隆々として研究の方法開けたりといへども、國文學はなほ前代の餘光  
を被れりといふべし。ことにこの物語のごとく、註釋批評の書多きに至りては、ま

づ舊説の大體に通ずる要あるべし。乃ち諸書を討究して舊説の樞要をかゝげたり。本書の主眼は、本文を考證し舊説を集成したるにありといへども、もと公務の餘暇に成れるものにして、なほ討究の至らざるものあるべし。少しくこの物語研究のたづきとならば、著者の望は足れり。

本書の編纂につきては、子爵福岡孝弟、文學博士上田萬年、和田萬吉、池邊義象、田中勘兵衛、黒川眞道、逸見伸三郎、外崎覺、田邊勝哉、八代國治、橋本進吉、諸氏を煩はしたる事少からず。茲に謹んで謝意を表す。

東京市外西大久保の僑居に於て

大正八年春

著者識

一古寫本 (武田本)

一卷 宮内省藏

一古寫本 (武田本)

一卷 内閣文庫藏

ろ 眞名本 (證本の二)

この本につきては眞淵が古本として推奨措さりしに對し、玉かつまに宣長の  
 駁論見えたりといへども、定家證本に對する一證本たる事論なし。  
世に流布するに  
 永廿年の板本

「六條宮御撰」とあるは後人の所爲にして、宮  
 内省藏桂宮家寫本この記載なきぞよろしき。

一寫本 (桂宮家本)

一卷 宮内省藏

一寫本

一卷 内閣文庫藏

一寫本 (加藤枝直手寫本)

一卷 東京帝國大學藏

一板本 (寛永二十年刊)

二卷 著者藏

一續群書類従本

一卷 著者藏

は 塗籠本 (證本の三)

此本終に「此本は高二位本朱雀院のぬりごめに納まれりとぞ」とあり。

諸抄に見え  
 たる七本の

一に高二位尼本とてあり。高二位尼は彼齋宮腹の子孫にして業平四代の後裔高  
 階成章が女といひ、この本、業平自記の本に少々私の歌物語を加へたりといふ。群書類従本の奥書

這伊勢物語者京極黃門定家卿息女民部卿局之眞翰無疑者也。

寛文四 甲辰 初冬

冷泉 左中將爲清

右朱雀院塗籠御本伊勢物語一卷以森山孝盛所藏民部卿局眞蹟本一書寫一校而雖假名遣不二樣誤字脫文亦不少不輒改之、一依原本。但衍文處々加三爪印筆。

とあり。

清渚抄「七流の本の外に塗籠の本といへるあり。是は朱雀院の御時長能道濟等に勅命ありて各了簡を加へ注を添へ塗籠に入れて御秘藏ありける故本の名となりて塗籠の本とはいふなり」とあるはこの本の如くに見ゆれど、長能が本ならば持使の條始にあるべきなり。

## 一群書類従本

一卷

著者 藏

## (參考)

參考伊勢物語

(清水濱臣書入)

一卷

池邊義象氏藏

舊本伊勢物語

二卷

著者 藏

伊勢物語考異

一卷

同

以上證本の校勘については尙次の古寫本繪詞斷簡の類を參考した。

一伊勢物語古寫本

慈鎮和尚筆  
二條爲家筆

須田彦九郎氏藏

一未詳摺寫梵字經零卷料紙伊勢物語繪詞斷篇

田中勘兵衛氏藏

凡

例

一 伊勢物語斷片

藤原清輔筆（手鑑）

徳川侯爵家藏

一 伊勢物語繪詞

詞、後伏見天皇  
繪、高階隆兼ノ筆アリ

福岡子爵家藏

一 伊勢物語繪詞摹本

（原本世尊寺  
行尹筆）

帝室博物館藏

一 伊勢物語繪詞

詞、在中將通福  
繪、住吉法橋如慶

津輕伯爵家藏

一 參。考。諸。本。

證本の校勘に參考せる諸本次の如し。

一 古寫本

一卷

宮内省藏

一同

一卷

同

一同

一卷

同

一同

近衛信尹筆

一卷

東京帝國大學藏

一同

一卷

同

一同

一卷

同

一同

一卷

内閣文庫藏

一同

豊原統秋筆

一卷

田中勘兵衛氏藏

一古寫本

烏丸光廣筆トイフ

一卷

故井上博士藏

一同

飛鳥井雅綱筆トイフ

一卷

同

一同

嵯川新左衛門親元筆

一卷

津輕伯爵家藏

一同

(三光院本)

一卷

八代國治氏藏

一同

黑川眞道氏藏

一寫本

一卷

東京帝國大學藏

一同

同

一同

後西院宸翰校合本

一卷

宮内省藏

一同

後小松院宸翰寫本

一卷

同

一同

後小松院宸翰寫本

一卷

帝國圖書館藏

一板

(光悅本) 村田春海  
等書入本

二卷

同

一同

(慶長板)

二卷

同

一同

(寬文板)

二卷

內閣文庫藏

凡

例

七

故井上博士藏

一同 (正保板)

二卷 東京帝國大學藏

一同 (元祿板)

二卷 宮内省藏

一同 (正徳板)

二卷 同

## 一 證本校合の標號

各證本の異同は

定家本三流の  
證本共……………(定)

眞名本……………(眞)

塗籠本……………(塗)

の標號を用ひて傍記し。

以上の外知顯抄は別流の證本と見るべ  
きのなれば(知)として傍記したり。同じ證本の中異流同じ定家本といふ  
ものゝ中にも三流あるの類  
をいふ。ある時は(異)として傍記したり。但し参考伊勢物語に校合したる爲家本の如きまゝ爲本としてそ  
の名を掲げたり。これ同流他本と分別するの要あればなり。

## 一 攙入を圍む

ひじきもの段に於ける「二條の後のまだみかどにつかうまつり給はで、たゞ人にておはしましける時の事なり」とあるが如き、又つ、いぢの、くづれの段における「二條の後にしのびてまゐりけるを世のきこえありければ、せうとたちの守らせた

まひけるとぞ」とあるが如きの類、すべて後人傍註の攪入せるものなれば圍みて正文と分てり。

### 一 各段の見出

この物語は個々の短篇より成り、從來各短篇を表すに、第何段といへりと雖、これ古本の體裁にあらず。今すべてこれを削ると共に、段々を表出すべき見出を附し、かこみて本文と分てり。例へば第一段を表出して「うひかうぶり」とせるが如し。

### 一 漢字の傍記

この物語はその始すべて假名を以て書かれたるものなれども、假名のみにてはよみ煩ふべく、乃ち漢字をもはめたりといへども、まゝ漢字の適合せざるもの又假名のまゝに存置せまほしきものあり。かゝる場合には假名を正書してその左右側に漢字をあてたり。ひんがし、おほきさい「大」の如き「后」これなり。  
「東」

## 二 註釋

定家流布本の奥書「抑伊勢物語根源古人説々不同」とあるに按ふれば、平安朝の末葉既にこの物語につきて私勘を註付したる者ありしが如く、知顯抄など古註の内容その一端を窺ふべき者あり、足利時代に至りては一條禪閣の愚見抄出で、註釋史上の新時期を畫し、西三條實隆宗祇と語らひて、いはゆる當流の説を始めしより以來、師弟傳授し以て江戸時代文運隆盛の時に及べり。

一 註釋參考書

次に本書に參考したる註釋書をあぐれば次の如し。

伊勢物語髓腦

一卷

伊勢物語知顯抄

(續群書類従本)

一卷

同 愚見抄

一條兼良

一卷

同 宗祇抄

宗祇法師

一卷

伊勢物語聞書

宵柏作  
宗祇校

一卷

伊勢物語抄

逍遙院談義  
稱名院聞書

一卷

直 解

西三條實隆

一卷

一  
卷

一  
卷

一  
卷

一  
卷

一  
卷

一  
卷

一  
卷

一  
卷

二卷

一  
卷

一  
卷

二卷

一  
卷

一卷

同 難義註

伊勢物語抄

伊勢物語槃齋抄

同 拾穗抄 北村季吟

同 集註 釋切臨

同 聞書 (慶長刊)

同 童子問 荷田春滿

伊勢物語童子問修刪 度會末雅

同 傍註 賀茂季鷹著  
松屋與清手澤本

同 賀茂季鷹著  
竹内直躬校合本

同 抒海 釋了意

同 箋 橘守部

同 古意 賀茂真淵

よしやあしや 上田秋成

一卷

一卷

三卷

五卷

十二卷

二卷

七卷

二卷

二卷

二卷

十卷

二卷

六卷

一卷